特集 北海道

屯田兵村を訪ねて——上湧別町

宮良 高弘

この二、三日、札幌は、これまであまり降らなかった雪が急に降り出し、天気予報は低気圧の到来をつげ、吹雪模様であった。前々から予定していた上湧別屯田兵村行きを、どうしても決行しようと思っていた矢先であった。

以前に、上湧別町の総務課長・長谷川末広氏と連絡をとったときには、「札幌が雪であっても、十二月の上湧別は、めったに降りませんよ。」との返事が唯一の頼りであった。

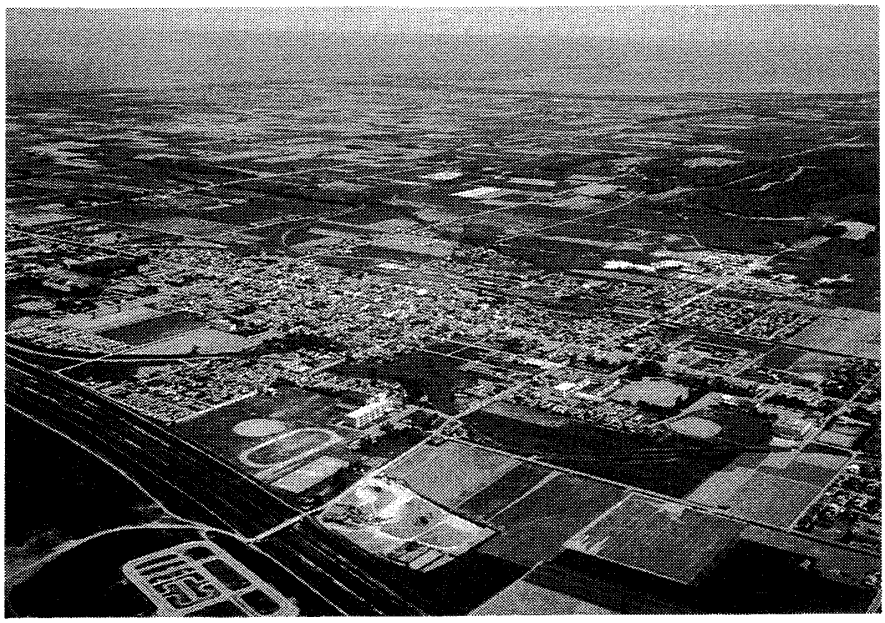
十二月二十日早朝、夜も明けやらぬ六時過ぎ、自宅を出たときにはやはり雪が降っていた。JR札幌駅から、七時五分発網走行きオホーツク一号に乗り、一路上湧別町へと向かった。名寄線が平成元年四月三十日に廃止され、もはや八カ月の月日が流れている。

列車は雪原を抜って北上した。線路沿いに続く木々の枝は、真っ白い新雪に覆われ、見渡す限りの雪景色が展開していた。旭川、そして上川を通過し、石北トンネルを列車が抜けてからは、雪もまばらで木々の間から、山の地肌さえ見えていた。

この分だと大雪に見舞われることはないかなと思いながら、十時三十四分遠軽駅に降り立った。遠軽からバスが三十分ごとに出ているという連絡であったからである。前々からコンタクトをとってはいたものの、長谷川課長が出迎えておられたことには、申し訳ない気持がした。

課長の運転する車は、ひたすら第二四二号線の雪道を走り、上湧別町総合庁舎についたときには、時計の針は十一時を回っていた。車中課長は、見通しの甘かったことをしきりに詫びておられたが、この時期を選んだのは

上湧別町市街地



わたくし自身であり、大いに恐縮した。
昭和六十二年に建築したばかりの、美しい新庁舎は多機能を備えた近代的ビルであった。長谷川課長の案内で、佐々木義照町長、井尾悦也助役に挨拶し、上湧別町調査の目的について説明をした。午後から本格的に降り出した雪の中を調査に入った。

屯田兵移住以前の湧別原野

明治五年三月、根室支庁は各郡の村名を定めたが、当時は村といっても和人の定住者はなく住民はアイヌだけであった。明治二十年には、上湧別にはアイヌが四十七人住んでいたという記録が残っている。
湧別川は、古くからアイヌの生活圏となっていた。河口の数個の村落が「ユウベツ村」と定められていたが、八年五月になって漢字の「湧別村」となった。明治四十三年四月一日に湧別村は、下湧別村（現在の湧別町）と上湧別町に分村され、今日の姿の原型が誕生した。
明治十五年に、はじめてこの湧別原野で開拓の鍬をふるった和人は、徳弘正輝であった。彼は、安政二（一八五五）年四月一日生まれの高知県土佐郡の人であった。同志と共に自由民権運動を志して上京し、後に網走郡長となった大木良房に、東京で偶然に遭遇し、北海道開拓に情熱を燃やしたのであった。
故郷に帰ることなく網走に赴き、一時は網走郡役所の役員となって徴税に努めたが、地味に富む湧別原野を永住の地と定めた。十五年秋にはアイヌの茅屋を根拠に銃を肩に、狩猟生活をして越年した。
翌春、大阪出身の和田麟吉と共同で半沢真吉の土地を借り、馬鈴薯や麦を試作し、相当な収穫をあげた。仙台の人・半沢は、早くも網走郡役場の役員を辞して、湧別に土着し作物の栽培を試験研究した人であった。半沢は、その結果をみてアイヌに農業を勧めようとした。
しかし、半沢はこの年の十月二日に紋別戸長に決まり赴任した。徳弘はその土地を和田と共同で譲り受け、畑作物の栽培に専念することになった。こうして徳弘は湧別原野で野菜以外の作物を栽培した最初の人となったのである。
明治十七年、和田は駅逓業に転向したので、徳弘は長沢九助や上野徳三郎等と協力して農牧に励むようになった。しかし、徳弘の農業に対する自信と情熱は押え難く、明治十八年に徳弘の作った馬鈴薯が、全道物産共進会に入賞し、褒賞を得ることになった。
徳弘は、農業経営に大いなる抱負と自信を持ち牧畜にも手を染めた。明治二十二年には、若者二人が奇遇し共に農業を経営し、大いに収穫をあげた。労働不足を補うために、東京

徳弘正輝

や土佐に走って労働者・医者・牧師等を募っていたという。明治二十九年北見を巡回した河野常吉は、当時の徳弘農場の模様を「河野々帳」に詳述している。

徳弘は、何時しかアイヌのエロッタの長女ホウを内妻にしていたという。巷の話では、徳弘が猟に出て雪崩にあい、ホウに介抱されて結ばれたという。ホウは、美貌と才能の持ち主で、二人の間には十人の子があった。

徳弘には、夏喜という日本人の正妻がいた。夏喜は、明治二十九年に高知の親戚の世話で、内妻と別れることを約束し、結婚のために渡道した。嫁いでみると、ホウは思いのほか子供が多く、徳弘と分かれたがらず、夫婦は早くも冷戦状態になったという。

夏喜は長男直三をともなって故郷へ帰ってしまった。周囲の説得で明治三十六年に、長男の直三の学齢期に再び湧別に戻ったが、寒さのため夏喜は、直三を病死させてしまった。夏喜はその翌年に千美を生んでいる。

幾多の紆余曲折があって、明治四十年八月には、協議離婚をして千美をつれて故郷に帰った。里方へ引き上げてからの夏喜は、母や妹と仲良く助け合い、病弟を看護し、その没後は母を看護し、母の没後は一人娘の千美の養育に専念した。

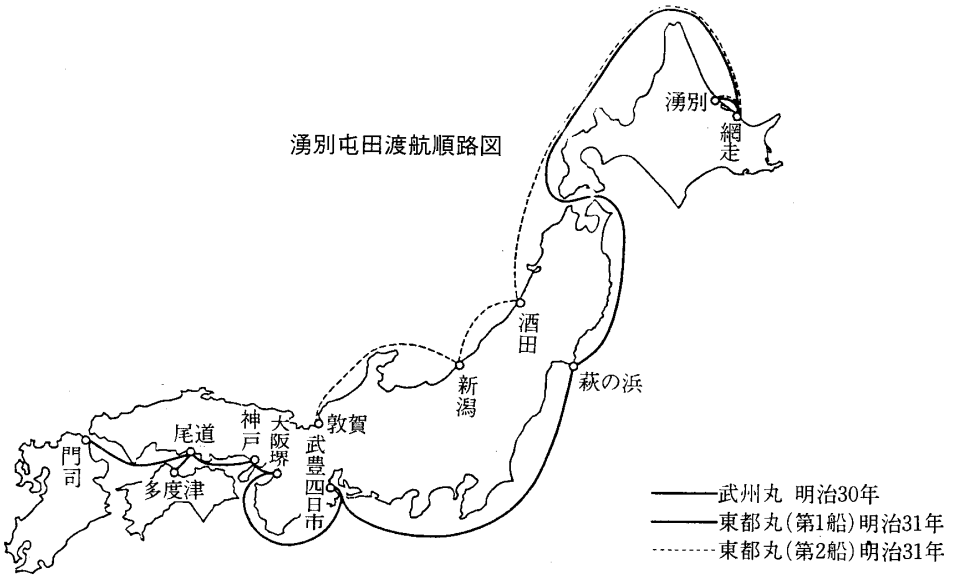
大津市に嫁ぎ、子宝に恵まれ、今では幸せに暮らしている千美は、幼い頃の湧別を思い起こし、「末っ子が大学を出て独立したら、是非渡道し、湧別の土地を踏みたいと思っています。父が精魂を傾けて活躍した湧別の地。兄直三が母の限りない悲しみの中で、幼くして逝った地。私自身この世に生を受け、産声をあげた故郷である湧別。はるかなる大津に在って、その日の来るのを楽しみに待っています。」と『上湧別町史』に一文を寄せている。

こうして徳弘は、昭和十一年七月二日に、波乱万丈の八十二歳の生涯を終えている。徳弘の半生は、アイヌと苦楽を共にし、アイヌを助けかばい、アイヌを心から愛し、村の建設にも、おのれをむなしくして奉仕した無欲な貴い生涯であった。

屯田兵の移住と定着

現在の上湧別町に所属する上湧別と中湧別に、屯田兵とその家族が移住してきたのは、明治三十年と三十一年の両年である。これが上湧別町の開基である。三十年に武州丸で一陣が、三十一年には東都丸(第一船、第二船)で二陣が移住している。一陣で移住してその翌々年の三十二年に生まれた高柳清治氏(九十一歳)は、両親や周辺の人々からの云い伝えと、自らの体験にもとづいて、当時の模様を次のように語っている。

武州丸は、五月二十五日に湧別浜に到着し



ているものの、折りからの強風のため艀に乗り移ることができなかった。食糧も不足し粥をすすりながら不安な二夜が過ぎた。二十七日になって、幾分か風がおさまり上陸を開始したのは、午後三時頃であった。

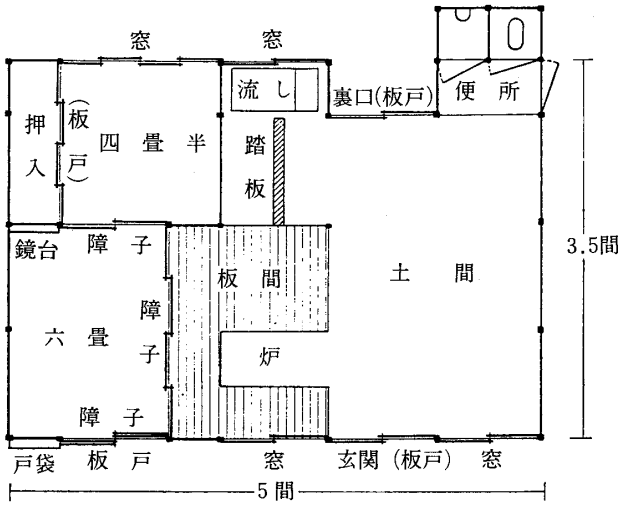
上陸した湧別浜に、二、三十戸の住み屋があり、ここに宿を乞うたが、中に入りきれずに、はみ出す者もいるほど手狭であった。目的地への道は、すでに開通していた。基線とは云え、馬車が往来する細長い三本道が続いているのみであった。

移住者は、荷物や幼い子を背負い、子供の手を引き、三列に並んで目的地へと急いだ。服装は実にさまざまで、山形県の女はモンペを着ていたが、他府県人の女は今のようにパンツもつけずに、着物を一枚ペロット着ているのみであった。裸足の人も多かった。さまざまな姿をした移住民が二十九日の昼頃、ようやく目的地にたどり着いた。

人々を待ち受けていたのが、屋根と柱だけの縦三間、横五間の小屋であった。網走郡役所では、移住民の受け入れに間に合わなかったのである。兵屋材にはタモやシロコの木が、割りやすいのでよく使われた。慣れない移住者にとって、壁の板張りには苦労した。

入地先は船中のくじ引きですでに決定していた。正式には、南兵村、北兵村と呼ばれているが、上湧別には四中隊、中湧別には五中

湧別兵村の兵屋平面図



高柳清治氏青年時代の一族
前列中央・初期入植者高柳金五郎
後列右側・清治氏。後列中央男と女の間の男子清治氏長男友五郎氏。

現在の高柳氏一家
左から清治氏、友五郎氏

屯田兵屋とその家族
(南浜村西村家、明治35年)

隊が、それぞれ入地した。各中隊は更にそれぞれ一、二、三区に分かれたが、高柳氏の両親にあてがわれた土地は、五の二であつた。

この辺りの土地は、どこを掘っても涌き水の出る湿地帯で、特に五の三、辺りはひどく、開墾をするにもカツラやタモなどの、大木の根が地表にまではびこり、まさかりの刃もたたずに往生した。

一戸宛に与えられた土地は、家屋の建っている周辺の土地を第一給与地と言い、その面積は六反歩であった。その他、耕地が第二給与地として四町四反歩が当てがわれた。給与地で開墾困難な土地は、交換にも応じてくれた。だから、家によっては耕地に飛び地がある。

当時は、会合しようとして寄ったら、話がなかなか通じなかったという。高柳氏は、子供の頃、祖母に連れられてよく村の集会に行ったが、言葉が分からないので、議題が決まったものやら決まらなかったものやら、判らなかったという。六軒組とか六戸組とか云って、組共同で風呂も沸かすようになり、次第にお互いが親しくなっていった。

この辺りには熊本県人が多く、たとえばザルのことをショウケといい、高柳氏は愛知県人でイカキといっていたので、理解できない言葉が多かった。いつしか標準語のザルと表現するようになり言葉は次第に統一されていった。

熊本県人に影響される言葉使いが多かったという。行ったとか、来たとかいうことを表現するのにも、イキオル、キオルと云って、移住当時は、行ったのか来たのか理解できなかったという。

都県別屯田兵村移住者とその生活文化

このように母村を異にする人々が担う生活文化の相違から、移住者は実際に生活を営んでいく上で、多くの不便を感じていたことが、容易に想像できるのである。そこで、都県別に母村や移住者の数を拾ってみると、なんと一都三四県、三九九戸、二、四五九人に及んでいる。

地域別に数の多い順にその内訳をみると、中部一五六戸（愛知七〇、岐阜三六、石川一八、福井一二、新潟一一、富山九）、東北九〇戸（山形三六、福島二八、宮城一六、秋田四、青森三、岩手三）、九州五七戸（熊本四三、佐賀五、福岡四、長崎三、宮崎一、大分一）、近畿四一戸（三重二九、和歌山五、兵庫三、奈良二、京都一、滋賀一）、四国二七戸（愛媛一一、香川九、徳島四、高知三）、中国二五戸（鳥取一四、岡山五、山口三、広島二、島根一）、関東三戸（千葉二、埼玉一）であった。

右から県別に多い順に並べてみると、愛知、熊本、岐阜、山形、三重、福島、宮城などと

屯田兵肖像画（上湧別町郷土資料館）

南兵村跡地に残る門柱

なり、これらの県人が上湧別兵村の大半を占めていた。移住当時の生活の模様を、お年寄りたちは言語や衣生活を通して、次のように語っている。

「ここへ来た時、井戸組ぐらいは挨拶をして回るということで、みんな挨拶回りをしました。ところが、言葉が分からない。入口の土間のところに並んでね、口の中でゴニョゴニョと言ってね、相手の顔を眺めて笑うんですよ。

すると向こうも同じように、こちらの顔をみて小さな声で何か言って、にこにこと笑っているんです。十日か十五日たってくると、だんだん慣れて、少しずつ分かってきましたな。

『そうだなも』、『そうばってん』というように、お互いにまねして冗談いったもんです。」と、愛知県出身の松野マサノさんは、言葉の通じなかつた当時を振り返って語っている。

加藤きよのさんは、「熊本の人に用があったので、畑に会いに行ったんです。どうにかお互いに話も通じ、もう帰ろうとすると、『いさぎよう生まれましたばい』って言うでしょう。これが分からんのですね。

何かが生まれたという事は分かるんですが、そこの家で赤ん坊が生まれるという話も聞いていないし、はつのうち何を言わっせると思って、いろいろ聞くと、栗の穂を指して『これこっちゃ』と言わしたから、ああそうか、栗の穂のでた事を喜んで言ったんだわいと思った。なんべんも聞くと、向こうもこれの事じゃとさすから、それで分かるのさなあ。」と、語っている。

逆に熊本の人の立場からみれば、加藤さんの話す「はつのうち何を言わっせる」などは、分かりにくい表現であろう。

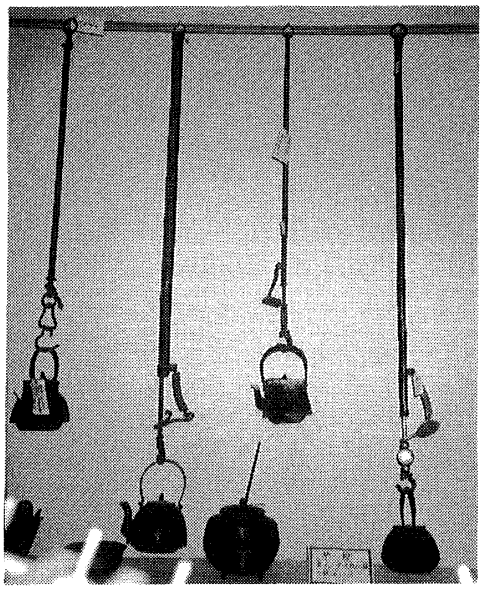
玉井元一さんは、「言葉に第一困ったね。訛を言うからね。東北では山形ね。九州もわからんかったね。餅つきの杵のことを山形ではキンギだなんて言うからね。一つ一つ、なんべんも聞いて判断しなければならなかったもんです。なんべんきいてもどうしてもわからんこともありました。」と云っているように、言葉の相違が一番困ったらしい。

このように日本全国から集まってきていたので、言葉だけでなく服装も、それぞれのお国ぶりの姿であった。畑にでる作業着なども、出身地によってまちまちであったという。

松野マサノさんは、「わしら愛知県なもんで、もんぺはくこと知らなかったなあ。仕事する時は、普通着をちょっと短くし、膝かぶの下くらいまでにして、脚絆をはいてなあ。

だから夏はブヨに食われるし、冬は晩かたになると裾に雪が凍り付いてコンコロコンになりましたなあ。娘たちは袂に赤いたすきを

生活用具



かけて新墾したもんですよ。袂をたくし上げるもんだから、腕を虫に食われてなも。ひどい時には、くわれた跡がおできになってな、医者に行ったこともあるな。

私なんか姉さんに、そうやって畑に行けと言われましたなも。それから、こんなことでは、とっても虫に食われるから、こんな袖(そで)ではだめだと言って、筒袖に縫い直して着たもんですのう。

初めは山形県の人の、もんぺ姿を笑っていたんですけど、あとからはみんながはくようになりました。早くからはいたら虫なんかにくわれなかったのにな、と笑ったもんですなも。」と、もんぺという山形県人がもたらした衣文化を受容していく過程を生き生きと語っている。

屯田兵村の社会生活と宗教

明治十八年に制定された「屯田兵志願心得」は、第一条に「平日ハ練兵ノ外、専ラ開拓殖産ノ業ニ従事シ、戦アルニ当リテハ、直ニ起テ敵ニ当ルモノトスル」と規定している。

北海道屯田兵の制度は、このことからも明らかなように、蝦夷地の警備と開拓のために、農業を職業として家族と共に生活をする土着兵の制度として設けられている。

一都三四県という母村を異にする都府県からの移住者によって形成された上湧別兵村において、社会生活を軌道に乗せていくには、日本人が長い間の生活過程に築いてきた寺社への信仰生活を通して、開拓民の心を統合することこそが、重要であったに違いない。

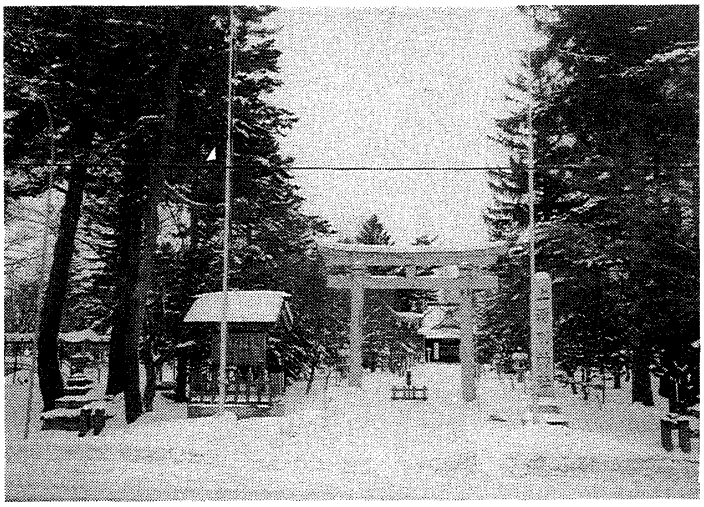
湧別地方には場所請負制度により、漁場への和人の進出がみられ、海難安全祈願のための弁天社が弘化三年（一八四六年）に設けられていたが、明治初期にこの制度が廃止されてからは祀られなくなった。

明治二十七年にウルワッカ河畔に設けられた神社が湧別神社の起源だといわれている。この頃ようやく湧別浜市街に和人の移住定着がみられるようになっていた。

兵村においては村落の確立につれて、明治三十二年七月には北兵村一区に水天宮が、同様に北兵村二区に八幡宮（明治三十四年秋）、南兵村一区に川上神社（明治三十五年十月）、南兵村二区に天満宮(明治三十五年一月)、南兵村三区に八幡宮(明治三十六年五月)、屯田市街に琴平神社（明治三十九年秋）と、部落民の寄付によって部落単位の無格社が建立されて行った。

昭和三年には村社格の上湧別神社が、神社建設のときに境内の片隅にあった琴平神社を合祀して建立された。祭神は、大国魂命・大己貴命・少名彦命・明治天皇である。寺院もまたこの頃建てられている。

覚玉寺　明治三十年十月には、屯田市街に



上湧別神社

浄土真宗本願寺派の説教所が本山の経費によって建てられた。この説教所は開設と同時に屯田兵及びその家族達が法話を聞く説教所として指定を受け、明治三十一年三月から五月までは、南兵村の仮学校としても利用された。説教所の新設や本堂増築などによって、寺院としての条件が次第に整い、明治四十年二月二十日には覚玉寺の寺号公称を許可された。

明光寺　明治三十一年春、中隊本部の許可を得て、屯田市街に八坪の民家を借り、屯田兵有志によって仮説教所を開設したのが明光寺の開基であった。明治三十三年起工、翌三十四年八月御堂建立、三十六年庫裡建築、信徒数一二五戸を数えた。明治四十五年四月四日に金剛山明光寺の公称が許可された。明光寺の記録によれば、曹洞宗は全移住者三九九戸中、一三八戸の信徒がいる。東北、愛知、岐阜など曹洞宗が普及している地域からの移住者が多いことを物語っている。

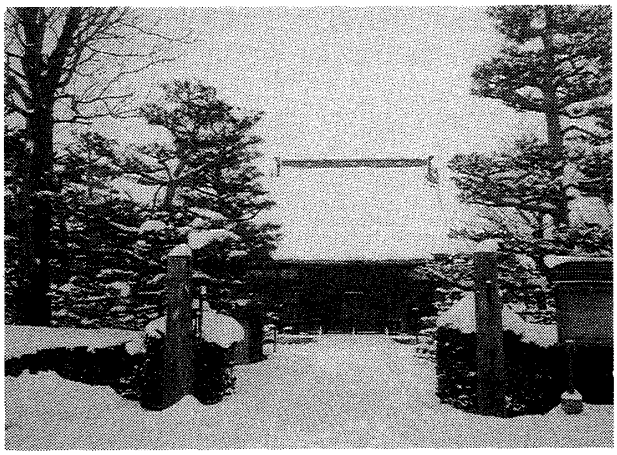
法徳寺　明治二十八年本山の命により湧別植民地に仮説教所を設置、明治二十九年浜市街に移転したのが湧別真宗寺であった。明治二十七、八年頃、六号線東一の風防林地に大谷派の説教所を、明治三十二年春、南北兵村の主力檀家の合意の上、中隊本部の許可命により屯田市街に移転した。明治三十八年十二月二日西龍山法徳寺の公称許可を得た。

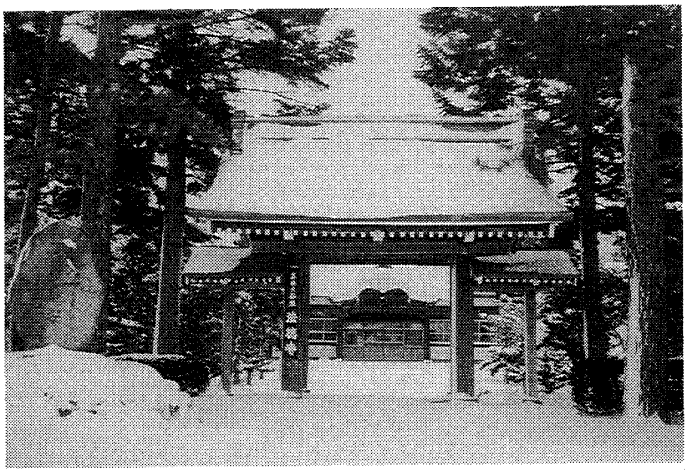
光照寺　屯田兵村が形成される以前の明治二十七、八年に、湧別村浜市街の信徒の招きで、札幌対雁村の法華寺から派遣された行川（なめかわ）日来が民家に寝起きして日蓮宗の布教にあたった。兵村に信徒が多いことから、明治三十五、六年頃、屯田市街の民家に移転し布教した。浜市街と兵村の信徒の希望により、彼らの寄付で、明治三十七年北兵村一区説教所が建てられた。昭和七年に、現在地に本堂と庫裡が建てられた。昭和二十三年六月一日に柴金山光照寺の寺号公称の許可を得た。

宝珠寺　明治四十二年八月、徳島県泉福寺の住職が屯田市街で民家を借りて、仮説教所を開設し、真言宗の布教を始めた。信徒が湧別方面に多いことから、利便のため大正九年に七号線の現在地に移り、本堂庫裡を建立した。大正十五年九月に注連山宝珠寺の寺号公称の許可を得た。

天理教北湧分教場　明治三十二年愛知県人が、北兵村一区の兵屋で、初めて出張布教師を派遣し、布教に務めた。四十一年五月元中隊本部の建物の一部を買収して一区中通り基線東側の現在地に布教所が建てられ、四十四年天理教北涌宣伝所が公認された。昭和十年北湧支教会に昇格、二十一年北湧分教会と名称が変更された。

こうして上湧別村内に六宗派の寺院の成立をみるに至った。兵村内に比較的信徒の多い宗派は、兵村内で説教所をもったが、信徒の


明光寺

法徳寺


少ない宗派は、浜市街などの信徒をも集めて説教所を設立するようになった。

このように各宗派の寺院が開設されていった背景には、各自の母村における家代々の宗教を踏襲しようという兵村移住者側の要求と、各宗派が自己の宗門を布教し、開拓地において広めようとする営為があった。こうして屯田村に息づいてきた移住者は、改宗することなく、出身母村の宗派をそのまま受け継いでいる。

湧別村内にあって、自由移民とは異なる特異な性格を持つ上湧別、中湧別の屯田兵村の人々は、日常生活はもとより宗教生活においても、中隊本部の干渉は免れなかった。

「屯田兵及び家族教令」第十五条に、「毎月指定ノ日ニハ説教所ニ至リ、談話ヲ聴聞シテ、益々徳義心ヲ養ヒ、兼テハ全村老幼話合セテ親睦ヲ図ルベシ。」と定められているように、民心の安定こそが開拓兵村の存亡の鍵を握っていたからである。

屯田兵の開拓施策を成功させるための宗教への介入であつたが、屯田兵各戸の家代々の宗派は多様であったから、たとえ法話は中隊命令で聴聞したとしても、その宗派まで変えることは出来なかった。

上湧別町の社会的性格と現状

上湧別屯田兵村は、これまで述べてきたことからも明らかなように、母村文化を異にする一都三十四県からの移住者によって形成された多異母村混合型の、わたくしの云うE類型の典型的な村落である。

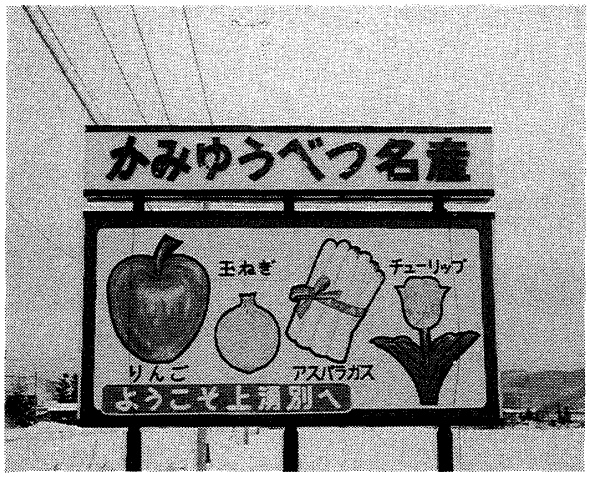
人口において優る愛知県人などは、高柳氏によれば、移住当初は県人会をつくり、北海道愛知県人会の支部となっていたという。しかし、上湧別屯田兵村があまりにも雑多な県人によって構成され、価値意識の異なる個別の生活文化を担う人々の集合体であったことは、同郷の県民を単位とする結合よりも、移住地域を主軸とする結合を優先させる結果となつた。

つまり、上湧別兵村が、屯田兵として特殊な任務を帯びていた人々によって構成され、南北のそれぞれの兵村は、更に一・二・三区に分かれ、それぞれの地域を単位とする兵務のスムーズな運営を可能にしたのであつた。出身県母村に偏らないように、屯田兵を募集した明治政府の政策が効を奏したと言えるのである。

村の発展とともに、開盛、富美、上富美の各地区が兵村から独立してからは、それらを加え、地区毎に建立された小・中学校教育や神社などの行事を中心とする地域的結合が推進されていった。

各寺院を中心する檀徒的結合、親族的紐帯などを地域内に包摂しながら、上湧別町は展

上湧別名産



開してきた。こうして地域を単位とする結合が次第に図られていった。

過疎化と時代の進展の波のなかで、昭和三十八、九年あたりから教育の充実を目指して、小・中学校の合併の話が持ち上がった。昭和四十一年には上湧別、中湧別、富美、上富美の各地区にあった中学校の合併が行われた。

建設場所の選定をめぐっては、地域エゴによる葛藤がみられた。六十一年三月には上富美小学校、富美小学校と合併した。このような地域的葛藤は、行政単位の町長や町議の選定においても影響を与え、南北戦争という異名を馳せたことでも理解できる。

りんご、ハッカ、馬鈴薯、ビートの生産地として知られた上湧別町は、現在もビートは、主要生産物の生産額第一位を占め、アスパラガス、玉葱、馬鈴薯、トーモロコシを多く産出している。山間部には酪農も盛んにおこなわれている。

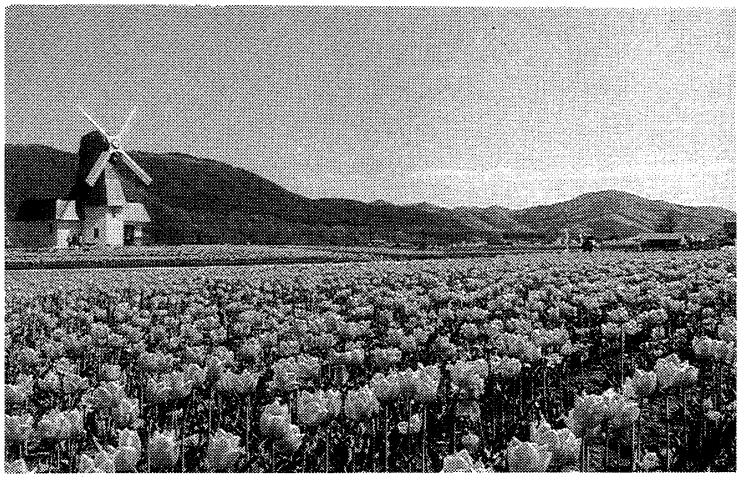
春には、桜、チューリップ、芝桜などの色とりどりの花が咲き、六月には「チューリップフェア」、七月二十二日、二十三日には「インターナショナルオホーツクサイクリング」、三十日には全道各地からの太公望が参加して「オホーツクフィッシングin湧別川」が催されている。

八月には本町の夏を彩る「屯田ふるさとまつり」、「七夕まつり」が五日から三日間、六日からはメイン行事として「全道サマークロスカントリースキー選手権大会」が、二月には「湧別原野オホーツク百kmクロースカントリースキー大会」が近隣四町村の参加者を集め盛大に催されている。

こうして、上湧別町は町民をあげて、地域社会の活性化へ向けて、急速に進む国際化の中で米国人を役場職員として採用するなど、明日へ向かって大きく羽ばたこうとしている。

●協力団体／網走管内上湧別町（佐々木義照町長、井尾悦也助役、長谷川末広総務課長、水野豊広報係長）
●協力者／高柳清治、樋口雄幸

《参考文献》
上湧別村誌編纂委員会編『上湧別村誌』昭和二十八年
上湧別町史編纂委員会編『上湧別町史』昭和四十三年、その他。


チューリップフェアー

湧別原野オホーツク 100 kmクロスカントリー大会。
“かがり火”の中の最後の力走。